

YMM PLAYER 別冊

HISTORY OF ELECTRIC GUITARS

— エレクトリック・ギター の 歴史 を 温 め て —



〈日本のE.ギター、30年の軌跡をコレクトする〉

JAPANESE E.GUITAR

AN ILLUSTRATED HISTORY

田中雄二／浅田 仁

●A●

ARIA DIAMOND
ARIA PRO II
ARGUS
ATLANCIA

●B●

BELL WOOD
BILL LAWRENCE
BOSS AXE
BURNS
BURNY
BRAIAN

●C●

CAMEL
CAMPBELL
CHARLES
COLUMBIA

●D●

DAION

●E●

ELK
EL MAYA

●F●

FANTOM
FENDER JAPAN
FERNANDES
FIRSTMAN
FOUNDER
FRESHER
FRISTER

●G●

GABAN
GALLAN
GANSON
GIBBON
GRECO
GUYATONE

●H●

HEERBY
HISONUS
H.S.ANDERSON
HONEY
HUMMINGBIRD

●I●

IBANEZ

●J●

JARAMAR
JOHN BENNET
JOO DEE

●

遙か彼方“USA”で
ブロードキャスターが誕生し
さらにはレスポール、ストラトキャスター…と
E・ギターがその栄光の歴史を刻み始めた時
確かに、この“JAPAN”にも
クラレンス・レオナルド・フェンダーや
レスター・ウィリアム・ポルフスは
在た。

●

彼等もまた
ひたすらドリーム・ホライズンを見つめ
その〈時〉が来るのを
待っていたのだ
1950年

Japanese E. Guitarは
既に
彼等の手の中にあつた…。

●

〈エレキ〉と言う名のエナジーが
日本全土を狂乱の渦に巻き込んだのは
それから10年後
1960年代に入ってからのものである
その魔快電波は
一瞬のうちに若者達の血管を電気に変え
一瞬のうちに浪漫と波乱の歴史をも生みだしてしまった。

●

以来
日本のE・ギター史は
本場アメリカ=USA以上に
劇的な伝説に満ちている
しかも
世界広しと言えど
かつてこれほどE・ギター〈ブランド〉が存在した
国=ワンダーランドはないだろう
“時代”と“世代”を駆け抜け
今尚、〈進化〉を続けるジャパニーズE・ギター
その“OLD&NEW”のブランド達を一同に会し
ここにお送りする。

●

●K●

THE KASUGA
KAWAI

●L●

LASER

●M●

MOON
MORALES
MORRIS

●N●

NAVIGATOR

●O●

OAKLAND
ORANGE

●P●

PEARL

●Q●

●R●

RIVERHEAD
RK. HERBY

●RO●

ROJE

●ROL●

ROLAND

●S●

SPLENDER

●SQ●

SQUIER

●T●

TEISCO

●TH●

THUNDER
T&JOO DEE

●TK●

TOKAI

●TM●

TOMSON

●TU●

TUNE

●U●

U

●V●

VESTA GRAHAM

●VI●

VICTOR

●VO●

VOICE

●W●

WASHBURN

●X●

●Y●

YAMAHA

●YAM●

YAMAKI

●Z●

ZENON

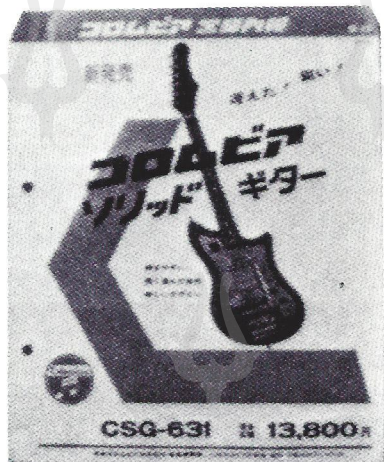
●ZEP●

★ COLUMBIA

●コロムビア ●日本コロムビア(株)

昭和38年頃登場したブランドで、第一次エレキ・ブームを巻き起こしたブランド群の1つ。当時のギター・スタイルは一概にデタッチャブル・ネック方式を採用しながらも、ヘッドストック&ボディの形状はオリジナル。しかもPUの個数も多いほど高級…的な、非常にユニークなギターづくりが大勢を占めていた。またこの頃は、外国のギターに真似るという事よりも、グヤトーン、テスコの2大ブランドに続けとばかり、この2社の先駆モデルに追随する仕様が圧倒的であったといえる。コロムビアはCSG-631というモデルを中心に構成、一見フェンダー・ジャズマスター、思わせるシェイプで人気を博していた。その他にも、同時にハワイアン(CEG-581533…)やアンプ(CGA-131、83…)も発売しており、総合的な楽器販売を早くから展開。日本の楽器産業に果たした役割は極めて大きい。現在は御存知の様にキーボードを中心に活躍している。

COLUMBIA



★ DION

●ダイオン ●(株)ダイオン

'81年に正統派オリジナル・モデルの開発を基本コンセプトに登場したブランド。その企画スタート時点から、日本市場のみでなくワールドワイドな市場参入を目的としているため、「パワー・シリーズ」と「サベージ・シリーズ」共に、インターナショナル・スペックを採用しているのが特徴。

特にパワー・シリーズの最高峰モデルであるMRAK-XXは、9ピース・メイプル/ローズ・スルーネックにエボニー指板24フレット、スリムなボディはトップ&バック共に削り出しのアーチドフォルム、サスティン面を十分に考慮したナットおよびブリッジは全てプラスチック製、PUはオリジナル「パワー・パルス」、しかもシングル&ダブルコイル・セッティングを可能としたミニSW付…、その他にも圧巻のスペックを凝縮。同シリーズのスーパー・ベース=MARK-XXBと共に、海外でも高い評価を獲得した。サベージ・シリーズはそのリーズナブル版で、やはり独特のオリジナル・デザインとハイコストパフォーマンスを徹底追求した仕様が魅力。その後もラジカルのデザインで知られるセミアコースティック・モデル=ヘッドハンターをリリースするなど、そのオリジナル展開にはユニークなものがあった。現在では存在しないが、コンプレッション・オリジナルとしては非常に精度の高いモデルを開発していただけに惜しまれるブランドだ。

DAION

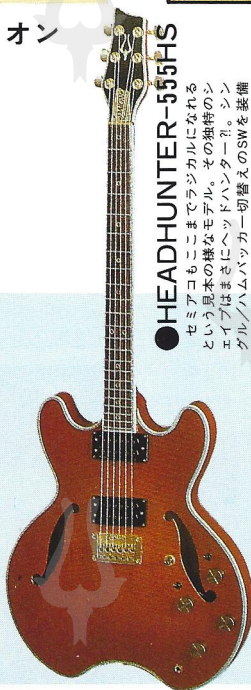
●MARK-XX

非常にシンアンプリジティニーなデザインが魅力のパワー・シリーズ。このモデルは、マテリアル仕上げ、そしてハードウェア等全てに最高級のリーダー・シリーズ・モデル。その抜群なクオリティ・バランスは、当時のオリジナルでも出色の存在であった。



●HEADHUNTER-555HS

セミアコースティックなラジカルになれるという風本の様なモデル。その独特のシェイプはまさにヘッドハンター?。シングル/ハムバッカー一切替えのSWを装備し、ヴァーサタイルなサウンドをセレクト・ポイントとしていた。



●MARK-XX-B



スーパー・ベースは、時代が早過ぎたのかも知れない。24F仕様のネックなどあとから現在のスペックを有している。他にも随所にアイディアを凝縮しており、まさに早すぎたスーパー・ベースである。

★ FIRSTMAN

●ファーストマン ●ファーストマン(株)

ファーストマンは、当初アンプが先行していたが、E・ギターへも'66年頃から参入。第一次エレキブーム後期という事もあって、中心モデルはやはりモズライト系で占められていた。中でも、セミソリッド構造をもつ「アベンジャー・コンボ300」と、セミアコースティック構造の「セレブリティー220」は、その仕上げ抜群のスリム・ネックとボディ、殆どバイブラ・ミュート「ドンズバ」のトレモロ・ユニット…等、モズライト顔負けの完成度で人気があった。価格は共に、当時でも破格の¥48,500。またファーストマンという、GSファンには懐かしいブルーコメッツがモニターしていたギターが思い出される。これは三原綱木氏の方が「リバプール・デラックス」でカタログには『1967年ブルーコメッツの三原綱木氏のために特別製作したもの。クラシックな中にもモダンを追求したユニークなデザインです。』とクレジットされている。レギュラーのリバプールはセミアコ構造になっていたが、三原氏のデラックスはそれより一回り大きいフルアコ・タイプになっていた。一方の高橋ケンジ氏のベースは「バロック・カスタム」で、やはり彼のために特別製作されたバイオリン・シェイプのセミアコ・ベースであった。また同社は、ギター&アンプ関係だけでなく、電子キーボード分野まで幅広く活躍していた事でも有名だ。



●ペンチャヤーズ・モデル

一旦モズライトとそのまま感じてしまふほどデッド・コピーされている。特にネックとバイブラート・ユニットはもう驚きモノ。



●リバプール

ハイブリッド・システム・タイプの中でも、ひとまね造形美にあふれているのが「リバプール」である。三原綱木氏専用のモデルは、やはり特別製作のモズライトというフルアコタイプなので、ブルー・デラックス・コンボ300のボディ・シェイプ・ピックガード・ブリッジ・ピックアップ・コントロール・ノブ・セレクター・スイッチ・ストラップ・ボタン・ミュート・ユニットなど、すべてを追求して作りこまれた。GS時代より一回り大きめのボディ・シェイプ・デザインで、これは三原綱木氏のために特別製作したもの。クラシックな中にもモダンを追求したユニークなデザインです。レギュラーのリバプールはセミアコ構造になっていたが、三原氏のデラックスはそれより一回り大きいフルアコ・タイプになっていた。



●バロック

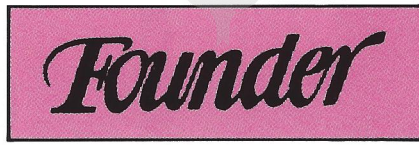


ギターのリバプールに対して、ベースはこのバロック・シリーズ。ブルー・コメッツの高橋ケンジ氏が使用していたのはやはり特別製作のモズライトでバロック・カスタム。この時代は何しろ圧倒的にセミアコが多く、やはり初期のバロックシリーズの影響を感じてしまう。それにしてもモズライト・ベースであり、ギタースタイルのオールアコという感じはあります。サウンドも、ホロウボディ特有の甘く深みのある音でした。

★ FOUNDER

●ファウンダー ●(株)ダイオン

'78年を中心に、ダイオンがヤマキと共に2枚ブランドとしてリリースしたハイコストパフォーマンス・ブランド。このリーズナブルゾーンをさらにスタンダードとジュニアの2シリーズに分け、ジュニア・シリーズでは実にストラト、レスポール、SG・ムスタング、PB…の各モデルに何と¥19,800という超ローコストを実現させていた。そしてスタンダード・シリーズには、上記のジュニア同様のモデルに加え、テリー、JB、リッケン(モデル4001)、はたまたフルアコースティック・モデルでES-175、セミアコースティックでES-335のコピー版までライン・アップするという充実ぶり。このスタンダード・シリーズは、ほぼ各社のミドルクラスにそのままあてはまる。材料の良さ、つくりの良さ、そして仕上げの良さを誇っていた。Fから始まるブランド・ネームも、大衆派ブランド時代にふさわしく、日本の第2期E・ギター黄金時代を象徴している。

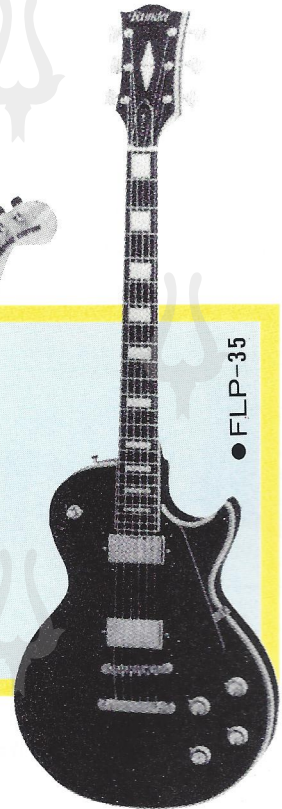


●FMS-20

ジュニアシリーズは全て¥19,800ながらこの仕様とこの内容。他にもSG、レスポール、ストラト等のモデルがあった。



●FLP-35



スタンダードのLPカスタム・モデル。パーチトップ&マホガニーバックだが、バイディング、インレイ等の仕上げは豪華。

★ JARAMAR



●ハラマー ●(株)神田商会

その木工技術の高さで知られる原山ギター製作所によって、'78年に製作が開始されたブランド。長い実績を誇るギター製作家「原山則勝」氏によるハンドクラフト・モデルだけに、ハイクオリティな仕上がりは群を抜いた存在であった。ラインナップは、ストラト(オールド&カレント)とPBの計3機種のみであったが、初めて指板にアール形状のエボニー指板を採用するなど、選り抜かれたマテリアルと完成度の高さで人気を呼んだ。またボディは完全ソリッド・1ピース、さらにラッカー塗装によるフィニッシュ、プラス・パーツ等、トラッドなモデルを使う立場からパーフェクトにフォローした仕様が特徴でもあった。まさにこれぞ「幻の名器」…。



●JST-900

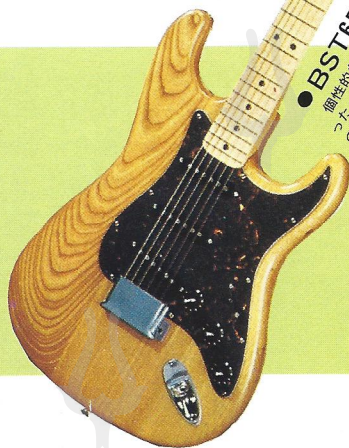
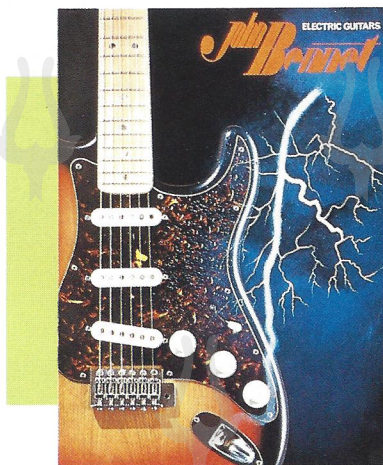
「幻の名器」とも言えるこのモデルは、その精度の高い木工技術に魅力があった。クオリティバランス抜群のオールドストラトのリファインモデル。



★ JOHN BENNET

●ジョン・ベネット ●(株)中井 楽器

'70年代中期に登場したこのジョン・ベネット。ベッコウ・タイプのピックガードをはじめ、ビジュアル的仕様のユニークさで話題を呼んだ。ラインナップはフェンダー系コピーが中心で、とりわけ個性を誇っていたのがテリー・モデル。これはフロントにハムバッカーPUをマウントし、ネックはストラトタイプという混合版。またPBモデルは逆にテレキャスター・ベースのネックで構成するといった個性派ぶりで、関西を中心にかなりの販売実績を誇っていた。全体のつくりも非常に精度が高く、ディテールにまでいきとどいた仕上がり、ボディにツヤケシを施したフィニッシュが特徴であった。



★ JOO DEE

●ジョー・ディー ●(株)ダイオン

「リターン・トゥ・オリジナル」をキャッチコピーにダイオンより登場したブランド。デビュー時('70年代中期)が丁度第一次コピーブーム全盛期であったため、ギブソン&フェンダー系を中心に、そのバリエーションには広いものがあった。JST、JTE、JLP、JSG、JTV、JPB、JJB、JRBと、そのシリーズ名でどのモデルかを連想出来ると思うが、全体的には非常に安定した仕上がりや誇っており、同時期に続々と参入してきた他のブランドと共に熾烈なシェア争いを展開していた。その後、日本のE・ギター界特有のスクラップ&ビルドの宿命よろしく、ヤマキへとブランド名も移っていく。



●JST-55

ホワイトアッシュ単板ボディにカレントタイプのメイプルワンピース。この当時から5ウェイのPUセクターと、その本格的なハードウェアで人気を呼んだモデル。



●JPB-60

メイプル1ピースネックをセンボディにボルトオンしたPBモデル。そのサウンド・クオリティの高さも該群であった。

★ THUNDER

●サンダー ●株日本畜針

これからE・ギターやベースを始めたいという人のために、ハイコストパフォーマンスを追求して製作されたブランド。'79年頃から登場し、このタイプとしてはかなり強力な広告展開で知られる。レスポール・カスタムで¥28,000というEL-280を筆頭に、ストラト・モデルではES-330&380、ムスタング・モデルでEM-320&500、レスポール・カスタムが先のEL-280、450&480、ベースではプレジジョン・ベースでEP-350、ジャズ・ベースでEJ-350というラインナップを構成していた。とりわけ3万円台が主軸で、エコノミー・クラスの割にはつくりがしっかりしており、十分使えるE・ギター&ベースという事で人気を博していた。この時代は競合ブランドが多かっただけにシェア争いも…他にフレッシュャー、ウエストミンスターの二大ブランドをはじめチャールズ、ファウンダー、ファントム、ワトソン、ベルウッド、そしてオークランド…等、ミドル&ハイクラス以上に激しい戦いを展開していた。このブランド乱脈時代を生き残った者だけが現在でも存在しているという訳だ。まさに'70年代後期こそ第二次E・ギター・ウォーズであったといえる…。



●EM-320
この時代はチャーの活躍もあって、ムスタングの人気が凄まじかった。サンダーのこのモデルも、ダイナミック・トレモロにシャーブはシングルコイルと本格派。ボディサイドのラインストラップもオプションで選択出来た。



●EL-450

アーチトップにゴージャスなセルバインディング仕様。オープンハムバッキングも精悍で、ユニークなカスタムパーツを構成。このモデルはもちろんセットネック。アタリヤキャブルネックでは、驚異のプライイス=¥28,000というLL-280も人気が高かった。

T & JOO DEE

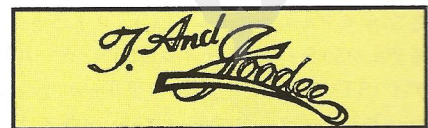
●T&ジョーデー ●株ダイオン

名工「辻四郎」氏のオールハンドメイドによるフルアコースティック・モデルのブランドが、このT&ジョーデーである。完全限定生産システムのもと、現在はGEM-AとGEM-Bの2モデルのみ製作されている。メイン・スペックは、ボディがスプルース単板トップ、メイプル単板サイド&バック、ネックはメイプルワンピースにエボニー指板でセットネックによるパーフェクト・ジョイント。もちろんトップは完全削り出しによるアーチド・フォルムだ。PUにはUSAデュアルモンド社の1100G（着脱自在タイプ）をマウントしている。パーツ関係では、ペグにグローバー・インペリアル、ピックガードそしてブリッジ&テールピースは全てオリジナルの製作によるものだ。フィニッシュはGEM-Aがブラウン・サンバースト、一方のGEM-Bがアンティーク・バイオリンとなっている。その卓越した木工技術、ディテイルまでいきとどいた入念な仕上げ、味わい深いフィニッシュ…等、まさに手工品ならではのテスト。そのトータルクオリティ・バランスは数少ないフルアコースティック・ギターの「究極」モデルといえる。



●T&JOODEE GEM-A TYPE

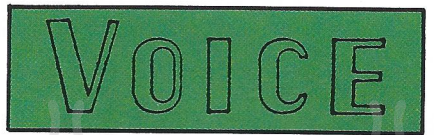
●ボディ：スプルース単板トップ、メイプル単板バック&サイド（フルアコースティック・ボディ）●ネック：メイプル、セツクネック/エボニー指板22F、ディバイデッド・ボジションマーク●PU：デュアルモンド1100G（着脱可）●コントロール：1V、1T●ペグ：グローバー・インペリアル●ゴールド●テールピース：オリジナル・タイプGカラマ：ブラウン・サンバースト



●T&JOODEE GEM-B TYPE

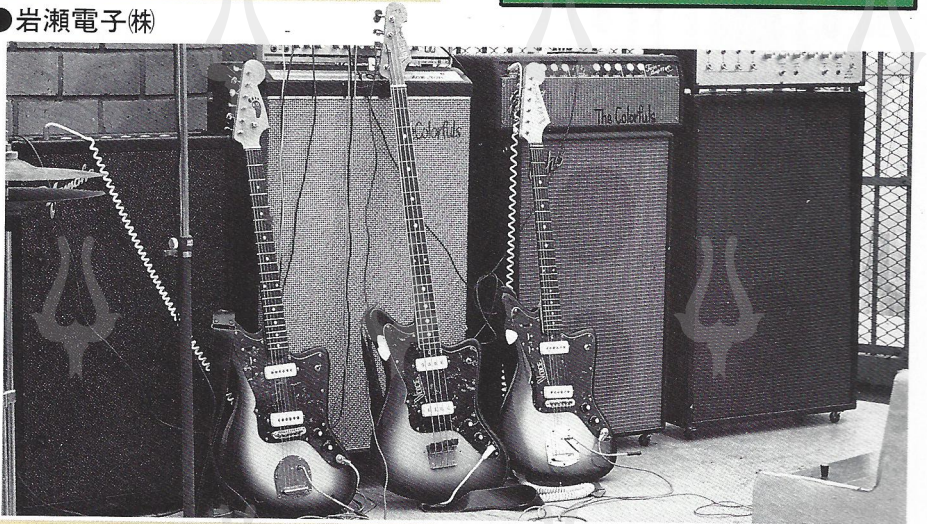
●ボディ：スプルース単板トップ、メイプル単板バック&サイド（フルアコースティック・ボディ）●ネック：メイプル、セツクネック/エボニー指板22F、ディバイデッド・ボジションマーク●PU：デュアルモンド1100G（着脱可）●コントロール：1V、1T●ペグ：グローバー・インペリアル●ゴールド●テールピース：オリジナル・エボニー●カラマ：アンティーク・バイオリン

VOICE

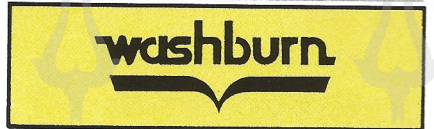


●ヴォイス ●岩瀬電子株

アンプを中心に展開していたブランドだが、1960年代後半からE・ギター部門も開始する。フェンダー系のコピーを得意とし、なかでもジャズマスターのコピー・モデル版「フロンティア」は、当時のサーフィン・ミュージック・ブームの時代性も反映し、非常に高い人気を集めた。このモデルは全体のアウトラインはもとより、ジャズマスター特有のワイドレンジなシングルコイルPU、ベッコウ・タイプのピックガード、そしてストッパー付のフローティング・トレモロ…など、そっくりそのまま再現。まさに、'60年代におけるフェンダーのオールディ感覚100%で、当時でいうデッド・コピー版とも言えるものであった。



WASHBURN



●ワッシュバーン ●(株)ダイオン (Early) ●ヘッドウエイ株

元来はアメリカのブランド名で、1876年にジョージ・ワッシュバーンがスタートさせた歴史的ブランドである。1980年頃からその一部を日本で製作する様になった段階で、国内でも発売が開始される様になった。企画とデザインをアメリカで行ない、製作は日本という日米混合の代表的モデルだ。シンメトリックなオリジナル・デザインで人気のあったSBシリーズを中心に、ハードロッカーにはユニークなシェイプのAシリーズも用意されていた。上位機種はスルーネックにバウンドボディを採用。そのアメリカを感じさせるハイセンスな仕上がりは、日本のギター界に新鮮なオリジナル感覚を提供したといえる。特にリーダーズ・モデルであるSB-30Cは、輸出も併行して行なわれていた関係で世界各国のプロギタリスト達もこぞって使用し始めたほどである。アメリカではウィング・シリーズとして現在でも高い人気を誇っている。

そして、'84年にエージェン트가変わったのを機に、そのラインナップも一新される。現在は、ルディ・サーズのスペシャル・モデルで世界的なヒットとなったB-70をはじめ、スティッキーなフォルムで人気抜群の「バンタム」ベース…等、ユニークなモデルを中心に構成している。またバンタム・ベースには何とヘッドレス・ツイン=B-62も追加され、マニアライクなファンを呼んだ。ギターも現在のところヘッドレス・タイプのGシリーズのみだが、近いうちに新しいシリーズも追加される事だろう。日米混合モデルが、今後益々盛んになりそうな気配だが、新生ワッシュバーンのタイムリーなコンテンポラリー・シリーズ展開に先ずは注目したい…。



●G-20V-MSR
ダブルカットウェイのフラットトップボディに、ハムバucker-X2をマウント。さらにSTUにはアンサー・システム2001[®]を搭載しヴァーサタイルなサウンドをプロデュース。

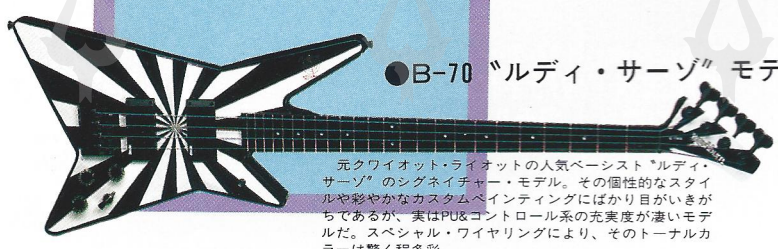
●RR-12VWN/R
ライブミュージシャンのためにデザインされたユニークなVシェイプが魅力。このタイプには珍しい2SH+1Sの2001のコンピネーションが、ハードメタル・ギタリストの技をさらにインスパイアさせる。

●A-20V-BBR
ブラックボディにレッドセルバインディングが個性的なフォルムをさらにひきしめている。PU、STU等…全てにベウイチューン・アップな仕様が発売以来ベストセラー中。



●バンタム・ベース

ヘッドレスタイプのスティック・ベース。ハイポジション部が弾きやすい様にカットしたボディが印象的。ウッドマテリアルならではの自然な響きというののもいいもので、そのサウンドは中々にしてヴァーサタイルだ。



●B-70 「ルディ・サーズ」モデル

元クワイオット・ライオットの人気ベーシスト「ルディ・サーズ」のシングルネイチャー・モデル。その個性的なスタイルや彩やかなカスタムペインティングにばかり目がいまがらであるが、実はPU&コントロール系の充実度が凄いモデルだ。スペシャル・ワイヤリングにより、そのトータルカラーは驚く程多彩。

★ YAMAKI

●ヤマキ ●株ダイオン

ヤマキは78年頃から登場したブランドで、コピーモデルを基本としながらも、その中に独自のユニークなアイデアを盛り込んだ製品づくりで知られる。先ずその特殊機構で話題を呼んだのが、ERS (= Epochal Rod Systemの略)ネックアジャスト機構。これはフェンダー系モデルのネックそり修正時におけるわずらわしさ(ネックまたはピックガード取り外し)を一挙に解消したもので、ネックセットプレートの下に仕込まれたギア比17:1のアジャストギアをレンチ1本で回し、ネックのそり修正が行なえるという画期的なシステムであった。次に、ギブソン系においてはコントロール配線部に一早くプリント基盤を採用し、さらにシールドボックスでノイズをシャットアウトするという徹底さ。他にも各種PUのリファインや、ハウリング、シールドリング対策に細かな配慮をみせ、非常に安定したサウンド・パフォーマンスを誇っていた。ラインナップは、ストラトがカレントで3機種、レスポールがスタンダードで3機種、カスタムで2機種、ベースではPB&JB共に3機種ずつ(オプションでフレットレス・ネックも用意されていた)…の計14機種で構成。また、生地着色を採用した塗装、全機種一貫したクォリティ・コントロールのもと、入念な内部処理、仕上げ…等、全製品にわたってその安定した品質の高さには定評があった。



●YST-550

アッシュ単板ボディにオールドタイプのSTネックをビルトイン。ユニークなPU配列(但しシングルコイル×3)で大きな話題を呼んだモデル。ザ・バンド風のサウンドが聞こえてきそうなベストハイモデル。

●YST-800

画期的なアジャスト機構"ERS"システムを採用したカレントストラト・モデル。シールドリング面での配慮も完璧で、その高精度な木工技術と共に高い完成度を誇っていた。PUにはUSAマイティマイトのNo.1100×3で、クォリティの高いサウンドをプロデュース。

●YLP-800

ヤマキが特別に開発した5000ワイヤリング・2ターンのPUを搭載した、ハイクォリティ・モデル。コントロール部にもプリント基盤を採用するなど、木部本体からPU、そしてハードウェアとパーツまで、トータル完成度の高さを誇っていた。

●YJB-800

スリム&ナローのメイプル1ピース・バウンドネックをアッシュ単板ボディにビルトイン。PUにはUSAマイティマイト社のNo.1600×2で、抜群のサウンドクォリティを実現。この時代ならではのカレントタイプJBの傑作コピー版。

★ ZENON

●ゼンオン ●株全音楽譜出版社

ゼンオンもまた、非常に歴史のある老舗ブランドといえる。第一次エレキ・ブームの頃には既にE・ギター製作を開始しており、当時としては非常にモダンなスタイル、仕様が特徴であった。右の写真からもそのユニークさは十分伝わってくる。アルミ製のピックガード、当時特有のPUセクター-SW、ミュート付のトレモロ・ユニット、そしてボディ&ネックのデザイン……全てが時代そのものを象徴している。全体的なアウトラインは、フェンダー系が中心でヘッドストックのデザインが1モデルずつ違うあたり、初期のラインナップとしては中々興味深い。また、ゼンオン・ブランドとしては、この第1次エレキ・ブームと共に一時姿を消すものの(その後、GS時代は栄光のゼンオン・モラレス、そして'70年代前半はロジェー)、'70年代中期から再びロジェをベースに復帰するという面白い経歴も持っている。The time they are a-changin'……。

▶ゼンオンのモ・ギターの歴史もずいぶん古く、このPHOTOを見ただけでも当時のファンキが十分伝わってくる。1本1本がそれぞれ個性的でそのオールドファッションな仕様がたまたまなくテイステイだ。特に一番手前に横たわっているモデルなどは全体的にうまくまとめられた非常にセンシブルなデザインと言える。それ以外にも、Dの形状、フロートティングスタイルのトレモロ、そしてピックガード上でアセンブリ方式といったスタイルが定着されているのを見るにつけ、やはり当時からフェンダーの影響かというものをまざまざと見せつけられる。さりげなく意識的におかれた!?、スプートニクス等のレコードが懐かしいばかりだ……。

ZEN-ON

